

週日の説教

金トマス・アクィナス 神父 2010年1月29日(金)

(金 大烈・ザベリオ神父様の同時通訳にて)

《傷の癒し、四つの方法》

こんばんは、皆様。今日は、説教をした方がよいでしょうか、それともしない方がよいでしょうか。毎日続けて説教を聞いているから、飽きたのではありませんか？(笑)

では、サベリオ神父様に説教をさせられることに従順して、私が韓国に帰る日まで皆様に話させていただきます。私は今、サベリオ神父の縄張りに来ていますので、あまり力がありません。私がいるところへ行けば、逆になると思います。(笑)

今日の福音(マルコ 4・26 34)では、イエス様が神の御国について述べ伝えられましたね。そしてイエス様ご自身も、「御国を述べ伝えるためには、何か印が必要だ。」と話されています。「私は天から下った者だ。神様の息子だ。」と口で言うだけでは、人々を信頼させることはできない、ということでしょう。弱い人間の心は、いつも奇跡を要求しています。ですからイエス様は、神様の御国を証明するためにいつも『治癒、癒し』を一つの印として見せてくださいました。そして悪魔を追い払いました。弱い人間達が信仰の道を歩めるように、導いてくださったのです。癒しと悪魔を追い払うことは、イエス様がこの世で行われた事の中で、一番大事な印です。同じように、今の世の司祭たちに与えられた使命の一つも、治癒と、悪魔に取り付かれた人々を解放することでしょう。司祭も弱い人間ですが、司祭としての役目を果たすために、神様はそういう能力をくださいました。

では皆様、『治癒』とはどういうことを言うのでしょうか。治癒には、『霊的な治癒』と『肉的な治癒』があります。皆様に質問をします。『霊的な治癒』と『肉的な治癒』と、どちらが大切だと思われませんか？『霊的な治癒』ですか。皆様は私よりよく分かっているじゃないですかね。人間は、体が病にかかると「この体を治してください」という望みが生じます。それは、当たり前のことです。けれども『霊的な治癒』が行われれば、自然に体の治癒もついてきます。

次に、その『霊的な治癒』もまた二つに分けられます。少し難しい言葉なのですが、『人性(じんせい)の治癒』と『霊性の治癒』の二つの種類になります。さあ、また質問をさせていただきます。『霊的な治癒』のうち『人性の治癒』が大切なのでしょうか、それとも『霊性の治癒』が大切なのでしょうか。『霊性の治癒』ですか。しかし、それは間違えた答えです。『人性の治癒』は、『霊性の治癒』の何百倍も大切なのです。人性に傷を受けてしまうと霊性的な生活はできません。

そしてまた、『人性の治癒』も二つに分類されます。簡単に言いますと、傷の種類による分類です。『覚えている傷(意識的な傷)』もあるし、『覚えていない傷(無意識的な傷)』もあります。例えば、ある人は傷を受けた記憶はないのに、いつも暗い表情をしています。それは、『無意識的な傷』があるからでしょう。「氷山の一角」という言葉のように、「表れている部分より、表れていない部分のほうがもっと大きい」ということですよ。

『無意識的な傷』というのは、生まれる前、お母さんの胎内にいた時にもらった傷を言います。皆様、お母さんのお腹の中にいた時の記憶はありませんよね。しかし、その10か月間に皆様が傷を受けた可能性は、とても高いと思います。逆に皆様も、身ごもっている間に赤ちゃんに傷をつけたかもしれませぬ。ある赤ちゃんは、自分が墮胎されるのではないかという緊張感で10か月を過ごします。

これは、ひどい恐怖感でしょう。赤ちゃんは、胎内にいても「いつ殺されるか分からない」という怖さを感じとることができるのです。そのような環境で育った赤ちゃんは、生まれた時からいつも、自分を保護しようとします。わけもないのに、親に対して反感を持って大きくなります。そして自分でも、なぜそのような態度を見せているのか理解ができません。赤ちゃんがお腹にいる時にお母さんが誰かを憎んだら、その憎しみは必ず赤ちゃんに伝わります。そのようなお母さんの否定的な感情の中で育った赤ちゃんは、百パーセント否定的な子どもになってしまいます。お母さんの憎しみの感情に囲まれて生まれた子どもは、大体暴力的な性格になります。そして、すぐ鬱に陥り、「死にたい」と言います。このようなことは、子どもの間違いより、親が悔い改めなければならないことです。そして『人性の傷』が癒されなければ、特に『無意識的な傷』が癒されなければ、絶対幸せにはなれません。

皆様がお持ちの記憶は何歳からのもののでしょうか。2～3歳までは、天才でも記憶はありません。しかし、その時に受けた傷は必ずあります。たとえば赤ちゃんの時に、裸にして洗おうとして性的な恥を感じさせてしまうこともあります。それが傷として残る可能性もあります。そして思春期になっても傷が残ります。誰にも言えない傷を持ちます。よく新聞に載せられる話ですが、酔っ払いの父親から性的な暴力を受ける子どもがいます。誰にも言えません。自分の兄から性的暴力を受ける妹もいます。70、80歳になっても心の中には、本当に血の涙を流している少女の姿があります。暴力を振るった兄には、記憶にさえ残っていないのかもしれませんが、妹は大人になっても、兄の顔を見たら本当に殺したい気持ちになります。そのような傷の記憶を、人間ははっきり覚えています。年齢に関係なく、消せないものです。はっきり覚えている傷は、必ずあると思います。男の子である兄や弟は、親がものすごく大切に愛情を示して育てたのに、なぜ私は女の子として生まれたのか、という記憶もあるでしょう。兄にはきちんと勉強をさせる環境を作ったのに、自分にはあまり関心をもっていなかった、というような記憶もあるでしょう。先生から、「お前はなぜそんなに勉強ができないのか」と叱られたことも忘れられない記憶でしょう。そして、教会で信仰の生活をしながら信者同士の間で受けた傷も忘れられないでしょう。今も目を合わせたら嫌な気持ちになる相手がいるでしょう。そして、司祭からも傷をうけることがあるでしょう。

このような『無意識的な傷』と『意識的な傷（記憶に残っている傷）』の二つを併せて『人性の傷』と言います。『人性の傷』が解決しなければ、霊的な暮らしには入れません。司祭になっても修道者になってもシスターになっても、その傷が自然になくなるわけではありません。事実、司祭の人性は神学校に入ってから作られるのではなくて、神学校に入る前に既に作られています。傷の多い人が司祭になると、信者に対しても傷をつけてしまいやすい傾向があります。その司祭の持っている劣等感が、人々を責めようとする形で現れます。たとえば、ものすごく貧しくて金持ちになりたいと思っていた人が司祭になってしまうと、多くの場合、物に対しての欲を捨てにくくなります。そして説教も、黒か白かという話しになります。たとえば、「子どもの時からいつも物を持っている人に責められた」という劣等感を持っている、説教でも、「金持ちならば地獄に落ちます。」という話をしてしまいます。そして、自分の召し出しについてもいつも危機感を感じています。シスターたちも同じです。修道服を着て生きていても、傷のない生き方をしていることにはならないでしょう。

平均して一年に1～2回、司祭の黙想指導を行っています。ある教区の司祭たちに黙想指導をした時のことです。黙想が始まった日に、引退されたお年寄りの司祭が、私の部屋へ訪ねて来ました。「頼みがあってやって来ました。私が神学校に行かせた息子のような司祭がいるのですが、叙階されたたった5年しか経っていないのに、司祭の服を脱ごうとしています。女性の問題でもありません。なぜ司祭職を辞めようとするのか、わけが分かりません。この黙想会に息子の司祭が来ていますので、面

談をしてください。」という話でした。そのお年寄りの司祭は、何回もお辞儀をして「お願いします。」と言いながら帰りました。

講義が始まってから見てみますと、その息子司祭は、一番後ろの席に座って、傲慢な態度で話を聞いているのが分かりました。その時私が感じたのは、“悪の勢力につかまれている”ということでした。だから、追い払う祈りを心の中でしました。司祭の顔ではありませんでした。しかし話が進むにつれて、だんだんその顔が、柔らかく穏やかになるのを感じました。二日目の夜、その司祭を自分の部屋に呼びました。そして話し合っ、彼が司祭の職を辞めようとする理由が分かりました。それは、父親に対しての憎しみでした。彼のふるさとは田舎で、巡回教会しかない場所でした。父親は、その巡回教会の委員長で、彼が子どもの時から、ものすごく怖い神様のイメージを教えました。教会の中で走ってふざけたら神様から怒られる、と。子どもの頃の彼にとって、神様はいつも怖い存在でした。神学校に入った理由も、父親から神学校に入るように何度も言われたからです。「父親が怖くて神学校に入りました。」と彼は言いました。そして「司祭になって5年間過ごしたから、もう辞めてもよいのではないのでしょうか。自分の道を歩みたいと思います。」という話でした。本当に父親が嫌いだったので、主の祈りの『私たちの父よ』と祈る時に『父』という言葉が上手く出なかったそうです。慈しみ深い神様のイメージでなくて、神様はいつも怖いお父さんのイメージだったそうです。そしてその司祭は、長く泣きました。私も一緒に泣きました。そして祈り始めました。毎日その日の黙想プログラムが終わると、夜中の二時まで二人だけで祈りました。黙想が終わる頃、彼は私のところへ来て、「司祭の生活を続ける決心ができました。」と伝えてくれました。そこで私は、引退したお父さんのような司祭に連絡をして、「ご安心ください。あなたの息子さんは司祭としてきちんと行きますので、心配なさらないように。」と伝えました。

司祭たちが黙想を終えて帰る日、フロントの前に大勢の司祭が集まって騒いでいました。出てみると、ドアの外にその老人の司祭が懸垂幕を持って待っていました。そこには、このように書かれていました。「神様、私の息子を生かして下さって感謝します。」と。

その後、お年寄りの司祭は息子司祭を連れて聖地巡礼に立ちました。聖母マリアと関係のある聖地を選んで巡礼しました。2ヵ月かけて、世界中の聖母マリア様と関係のある聖地は全て回って韓国に帰って来ました。その時、息子司祭は完全に違う司祭になっていました。聖母に対する信心とご聖体に対する信仰が盛り上がっていました。そしてそのお父さんである司祭は、このように息子を新しい司祭に作って、2ヵ月後に亡くなりました。聖地巡礼に立ったとき、そのお父さん司祭の体にはガンの細胞が既に全身に広まっていた。二か月の間、鎮痛剤を一つも飲まずに息子のために一緒に巡礼に伴ったのです。健康な体の人でも、二か月間歩いて巡礼するのは大変なことです。ご自分が持っていたその痛みを、息子の聖化（聖なるものになること）のために償いとして捧げたのでしょう。その司祭のお葬式のミサに私も与りました。息子司祭は、激しく泣きました。そして彼は今、聖霊指導司祭として一生懸命に頑張っています。

私がこのような話をしたのには理由があります。司祭も傷が多ければ、絶対に喜びながら嬉しく生きることができない、ということを申しあげたかったのです。皆様も全く同じです。ですから、信者の癒しをしなければならぬ場合は、とりあえずその人の人性を癒そうと祈ります。いろいろな司祭や修道者と面談する機会があるのですが、その人の持っている傷が大き過ぎて、私の心も痛めてしまう場合が結構あります。

では、『人性の傷』を癒すためには、どうしたらよいのでしょうか。教会は大体、4つの方法を教えています。

一つの方法は、治癒させる司祭が必ずいるので、出会うことです。その司祭を探しに行かなければなりません。しかし、現実的にそれは無理かもしれません。それならば、その司祭が話している言葉でも聞かなければなりません。治癒のカリスマをいただいた司祭は、言葉を通して人々を癒せます。だからその司祭の話のテープとかCDにでも本にでも、接触する努力が必要です。司祭は一人一人全部違うカリスマをいただいています。癒しのカリスマを持っている人もいるし、別の能力をいただく司祭もいます。

二番目の方法です。光が強いところへ行かなければなりません。特に聖地の光は強いです。傷を持っていない人はこの世の中にいません。家の中にとじこもって傷を癒そうとしても、効果はありません。家族全員が傷だらけなのに、その中でどのようにして傷を癒せるのでしょうか。そういう意味で教会は、信徒に“聖地巡礼をなさい”と薦めています。特に聖母の聖地は治癒の光が強いです。私がある聖母聖地もたくさんの人々が訪れて来ます。そしていろいろな治癒が行われています。いろいろな肉적인治癒も行われています。聖書で話されているいろいろな奇跡は、この聖地の中でも起こっています。二年前には、目の見えない牧師さんの目が開いた、ということもありました。日本には、秋田聖母聖地がありますね。是非行って来てください。

三番目の治癒の方法です。七つの秘跡に忠実に応じなければなりません。特に赦しの秘跡とご聖体の秘跡に正しく与ってください。

四番目の治癒の方法です。マリア様によく頼ってください。

カトリック教会は2000年間、『人性の傷』『霊性の傷』を癒す方法をこのような4つの観点から薦めています。多くの信徒は、自分の中にある『人性の傷』は見ようとしません。しかし、いろいろな黙想会や勉強会、祈りの会に与っても霊的に進みません。今日の福音のように、カラシの種はものすごく小さいものかもしれません。しかしそれを無視したり軽んじたり、大丈夫と思う気持ちで過ごしてしまうと、カラシの木のように大きくなる可能性があることを分からなくてははいけません。

イエス様はいつも、毎日のミサを通して、私たちの持っている傷を癒そうと準備されています。私たちはそれに信頼しながら、信仰の生活を続けなければなりません。

ありがとうございました。

傷の治癒

